

宝永在廻令

——中期岡山藩政と民百姓——

深谷 克己

序

先稿「大名綱政と綱政期藩政」⁽¹⁾において、岡山藩主池田綱政像とその治世期藩政との長い間の評価の懸隔を指摘して整合をこころみた。しかし、綱政期藩政の内容として私がつとも注目する「宝永在廻令」に関する検討は、掲載報告書の分担紙数の関係上、先稿では第3節でその存在と性格についてわずかに触れただけに終わった。その末尾で、在廻令の内容を別途論述することを約束しておいたが、本誌にさいわい執筆の機会を得たので、逐条的に内容を紹介し、私の見方を引き出していくうえで必要と思われるコメントを加えるかたちで検討をすすめたい。

天和の改革は民政の密度をより緻密にすることであったが、私見では、教諭支配を法度支配になじみ込ませることもあった。⁽²⁾賞罰の支配から教令性の強い支配方式に進めることである。⁽³⁾この方向に進むうえで、綱政治世期で注目すべきなのは、天和の改革からほぼ

四半世紀後の宝永五年（一七〇八）に出された長大な在廻令である。これは『法例集』巻之五「第三十 諸役人」の中で、「役」という小見出しの下に置かれているもので、「年号不詳 按ニ宝永五年歟 百五十八番之内 御郡目付え申渡」と冒頭に注記されている。その同じまとまりの中に、「未八月二日」という日付を持つ五箇条が最初に置かれ、あたかも一個であるかのように「子二月三日」という日付を持つ五七箇条が収められている。⁽⁴⁾宝永五年は「未」ではなく「子」であるから、該当するのは五七箇条のほうである。編者も発令年については推定にとどめているので、史料批判上の不安をぬぐいがたいが、かりに宝永年間でなくても、その政治史的意義は私見では変わらない。

「未八月二日」の五箇条も、綱政政権の下、元禄一六年（一七〇三）あたりになされたものかと推定するが、下方覚兵衛・舟戸久左衛門が提出した在方廻りの心得である。五七箇条はそれに続けて収録され、末尾に「子二月三日右書付、御郡目付中え於郡会所相渡」と注記されている。全体の性格は、天和期に新設された郡会所で

「御郡目付」たちに手渡された、いわば在廻りのための業務マニュアルである。⁽⁵⁾その中に、民政課題に押し出されるかたちで支配の吏僚制化・法治化がいつそう進行し、さらにその法治化の中に教諭支配の比重が高まることが読みとれるであろう。

1 在廻令の基本姿勢と出動態勢

(1) 一 御郡目付中、在出之時分、左之書付、銘々其心得ニては可有之侯得共、猶又御心得ニ書付申侯。在廻り之節、悉く御尋候義ニてハ無之候。左之書付を趣意ニして、一二ヶ條ニテも被存出次第、何となく被尋候歟、被聞合候様ニ有之、可然候。書付ニ載有之程之義を、御尋候様ニとの事ニては無之候。数ヶ條の品々を御含見聞有之、又ハ被申聞候様ニとの事ニ候。左之書付、外ニも此後存寄出来候は、追々相渡シ可申候。尤書付ニ無之義数々可有之候間、書付ニ載り不申候程ニ、見聞有之間鋪と被存寄候義ハ如何ニ候。惣して在中計ニ限り不申、勘右衛門・彦左衛門へ被仰付置候御用所へハ、自然／＼ニハ打廻り、見聞有之筈之由ニ候間、可被得其意候。

私は、この「在廻令」に近世政治の「中期的」な特徴を見ようとしている。それは大きな時代ごとの比較においては全時期を通じた近世政治の特徴と見なされるものとなろうが、近世の成立や弛緩・衰退を見ようとする視角に立てばあくまでも中期的なものとしての

限定をつけたほうがいい。「序」で指摘しているように、複雑な民間社会の事象を民政課題として正面から受け止めることで、吏僚制的な支配、法的な支配が初期よりも深化し、さらにその中で教諭的な支配の比重が高まるという特徴を持つ。そういう意味で近世政治の成熟期、近世社会の上昇期をあらわすことになるが、それが近世の終末まで続くことはできない。中期的な公義への社会の恩頼感は逆の方向に、つまり不信任感に向かい、公義離れの社会意識をしだいに沈殿させていくと考えられるからである。中期的な高さが記憶されていればいるほど、その失望感は深まるとしてよいであろう。

この条項は、罪科・越度・曲事を威嚇にして様々な規制を強める初期の支配とくらべると、それから真反対と言ってもいい姿勢に立っている。

五七条の冒頭の条項では、郡目付の「在出」「在廻り」に当たり、以下の多くの聞合せ事項はけっしてマニュアルの通りにすべてを調べよというのではなく、在廻令の精神を汲んで、その場の事情にふさわしい「一二ヶ條」だけでも、無理強いにでなく、「何となく」尋ねるか聞合わせるかするようにと注意を与えている。このように細かに配慮される文脈では「尋」ねる行為と「聞合」わせる行為の間にも硬軟の違いが想定されているとみてよいであろう。その理解を前提にすれば、「数ヶ條の品々を御含見聞有之、又ハ被申聞候様ニ」という部分も、条項別にきちきちとはなく、関連箇条を取り

合わせて聞き出したり、申し付けたりするようにという意味にとるのがよいであろう。また逆に在廻令に載っていない事柄も「数々」あるであろうから、それらを「見聞有之間鋪」と思いちがいでしてもならないのである。

このような中期藩政の藩士への注意は、陣中訓のような強硬なものではなく、完全に「無事の世」に転換した状況を前提としたうえでの藩役人の心得である。「何となく被尋候歟、被問合候様ニ有之可然候。」という曖昧さ、柔軟さが、領民への思いやりであるか巧妙な支配手法であるかは検討の余地があるが、ともあれ、郡目付の職務遂行に細心の気配りを求めていることはまちがいない。そのことの土台には、細心の気配りの統治を、いわば強要している民百姓の世界の分厚さ——分厚さを増した近世社会を私は「民間社会」と呼んでいる——があるというように受け取るべきであろう。

561 各御郡廻り之儀、此方より御指図不申候共、御仲間無故障御揃候ハ、式人程宛御廻り可有候、病人も有之歟、又は御郡会所御用之義も有之候ハ、式人ハ御無用一人宛ハ常々在御廻り、年中懈怠無之様に御申合御勤可有候。在中御用次第跡之無構、三人ニても四人ニても在出可有事。

これは、「在廻令」の末条から二つ目の条項である。「御郡廻り」は指図で動くのではなく、「仲間」で自主的に判断して通常は二人ずつ——必要なら三人四人で廻ることもある——が組んで廻る。故障や事情があれば一人で「常々在御廻り、年中懈怠無之様に」に勤め

よという指示である。

571 勘右衛門・彦左衛門を初、在方御用人何れニよらず在中え罷出、主人ハ不及申下々に至迄、権柄成義又ハ不法之族有之歟御聞届可有候、右之品御聞候ハ、早々御申聞可有之候事。

「在廻令」の最期の五七条目だが、在方用人の活動が在中で「権柄」あるいは「不法」なことを行ったかどうかを聞き合わせて、そういうことがあれば言い聞かせるように指示している。なお「序」で触れたように、末尾に「子二月三日右書付、御郡目付中え於御郡会所相渡」とある。

2 藩役人の百姓評価

(2) 御郡奉行銘々請込之御郡え被申付様、如何様ニ有之候哉。大庄屋・名主ハ不及申、小百姓ニ至迄、其御郡之奉行結構ニ有之候哉、又ハ夥敷有之哉、強弱御聞可有事。

近世後期に入ると、諸藩で百姓監視のみを目的にした種々の目付が諸藩に置かれることを考えると、ここでの御郡目付が百姓監視に先んじて百姓支配者の監視から始めていることに注目したい。しかも上層の大庄屋・庄屋にとどめず「小百姓ニ至迄」、当地の奉行がどうであるか「強弱」を聞きあわせるようにという指示である。「強弱」という聞き方は、第一条の「何となく」という聞き方で実状を把握しようとするものであろうが、ともあれ、統治の深度とい

う表現で呼べば、最深部にまで領民を把握しようとする藩政意思が反映していると言えるであろう。

そして、領民に対してこのように対応できる「武士」であるためには、主君馬前での槍働きの観念をほとんど払拭した「役人」への家臣の造り替えが進行していなければならないはずである。

(3) 一 毛見之節、御郡奉行如何様の存入ニテ跡見中へ被申談候哉。

又下毛取の者、并跡見へ付参候付廻シ之者へ、御郡奉行より被申付様如何様ニ有之哉、并跡見中へ不及申、下毛取人付廻シ之者勤方の様子、百姓の受口可有見聞事。

「百姓の受口」とは百姓の評判・評価であろう。毛見（検見）の際の郡奉行以下諸役人の「勤方の様子」を百姓がどのように見ているかを「見聞」せよというのだから、先の条項と同じ趣旨である。

(5) 一 御代官中宗門改・荒改又ハ御年貢取立御藪垣結・竹伐被申付候品々、如何様ニ被相勤候哉、人ニより百姓共難儀仕候品も有之哉、被聞届置可然事。

代官たちが宗門改めや荒地改めや年貢取り立てなど村々の百姓を対象にしたり百姓を使役したりする種々の業務執行の際に、「百姓共難儀」になっていないかどうかを点検することを指示している条項である。そしてそれを確かめるのは、村々百姓の経験を尋ねるほかないかぎり、領民の藩役人評価を聞くということにはほかならない。

3 百姓出願への対応

(4) 一 毛見前ニ稲毛の善悪尚以被見及置、毛見願申間敷立毛を毛見願出申様成村有之候ハ、其御郡奉行へ立毛之様子被申談可然候。又立毛願出可申立毛ニ候所、名主心得宜作配仕、毛見願出不申様成村有之候ハ、能御見届候て可被申聞事。

「毛見前ニ稲毛の善悪」を目付は判断しておいて、検見願いをすべきでない村が願い出た場合は郡奉行にその不適切を指摘する。他方、検見願いをすべき村で名主が適当な処置をしている場合は、実状をよく見て出願をすすめる。ここにはやみくもに検見願いに応じたり押さえ込んだりするのではなく、判断をあらかじめ作っておいて村々の実際に応じて対応していくことが指示されている。

とすれば、ここでは、目付はたんに檢察役人であるだけではならず、農業生産に関する専門的な判断能力を持っていることが期待されていることになる。

4 村役人の能力・精情評価

(6) 一 兼て惣大庄屋共え申渡候趣能吞込、村方へも切々打廻り申聞候哉、村方之者如何様ニ承込居申候哉、何となく御聞、心得違居申様子ニ候ハ、其品能御申聞可有候。所々ニて御聞、間違候

品有之候ハ、申渡候大庄屋え間違之品御申聞可然事。

御郡目付は、藩から大庄屋へ申し渡した布達を大庄屋がよくのみこみ、村方を廻ってきちんと申し聞かせているかどうか、村方のほうがどのように理解しているかを、これまた「何となく」聞き出し、もし村方が間違った趣旨で受け取っているならば、大庄屋の認識を改めさせる。

この場合、直接村方へ認識の訂正を申し渡すのではなく、藩意の理解度を大庄屋の威信が失われないように「何となく」確かめ、大庄屋の認識を改めさせることによって藩政の効果をあげようとしているのである。性急に藩が顔を出すことを避けて、村政の機構を十分に機能させることを最優先にしていると言えよう。

(7) 一 大庄屋初名主、役義精を出し相勤候者、又は不精ニ有之歟、御見聞可有事。

「大庄屋」だけでなく村ごとの「名主」の精惰を「御見聞」というから、これも先の条項と同じように、罪科を調べるようなやり方でなく「何となく」の百姓らの評判を集める方法を取ったのであるう。

5 百姓負担・村機構の実態認識

(8) 一 郡割・村割之儀下役人申渡遂吟味候。高一石に如何程掛り申候哉之儀、問ニ御尋置可有候。

宝永在廻令

これは郡・村単位に掛かってくる百姓負担が一石あたりどれくらいであるかを把握しようとするものだが、すでに「下役人」が「吟味」し終えたことであるけれども、それを「問ニ御尋置」というから、これも「何となく」のやり方で探ろうとしているのにちがいない。

(9) 一 一ケ村ニ保頭一人宛有之由、村ニより式人も有之由、村方ニて如何様ニ遣われ候哉、保頭ニ御尋置可有候。

村内の「保頭」という職務は、村に一人ということになっているが、二人の村もあるし、またどのような機能をもつ存在であるのかも藩が任じたものではないので明らかでない。これを「保頭」に直接聞いてみるというのである。

6 貧者層への手当て

(10) 一 各在廻りの時分兼て申候通り、火用心見分之様ニ御申、貧者の家内へも御はいり、かまどの廻り、灰屋上ケ塗之儀など御申聞、家内之様子被見及、大庄屋并名主・五人組頭見廻りニ参、如何様ニ申渡候哉と御尋可有事。

強引さを徹底して避けつつ為政の意図は果たす。この条項はそういう細かさをあらためて感じさせる。「火用心」の具合の点検という共同体の運命に共通する名分で「貧者の家内」に立ち入り、「かまどの廻り、灰屋上ケ塗」など村内貧困層の住環境を検分し、その

状態について大庄屋・名主などの村役人層、および近隣生活の責任者である五人組頭が日頃どのように指示しているかを尋ねる。困窮者の生活調査を名目にしないのは、次の理由による。すなわちこの「御尋」は村役人層の行為の評価を求めることになるが、その結果、能力・精悍だけでなく貧困層に対する誠実さもふくめて弱点があると藩が判断すれば、藩はそれら村役人層に対して教令するのみであって、村に対して直接には藩の権力が臨まないという、先にみた立場を取っているからである。

(11) 一 貧者の家屋根大破損并壁落居申家有之候ハ、其村之名主え如何様之訳ニテ右之通ニハ仕置候哉、御尋可有候。村育之者え五人組合之者よりの擬作、又ハ名主より心入之品御尋、役人共不埒之義有之候ハ、早速御申付候通可有事。

「貧者」の家屋の内が見えない困窮ぶりでなく、誰にも見える外回りの困窮ぶりが見出され、かつそれが放置されている場合はどうするのか。「貧者の家屋根大破損并壁落居申家」というのはほとんど崩落状態の家屋だが、これに対しては、その村の名主に「如何様之訳ニテ右之通ニハ仕置候哉」と尋ねる。

以下の意味にやや不明さが残るが、「貧者」は「村育之者」であって村請のかたちで成立たせなければならぬが、それについて、「五人組合之者」「名主」がどれだけ努力しているかを問い、「役人共不埒之義」が見出されるとすれば、「早速御申付候通」に処置することを命じている。この「御申付」は藩が郡目付に指示している

ことであって、その内容はわからないが、これまでの姿勢からすれば、ただちに越度に問うというのではなく、村中責任の教諭を加えるという処置が推測されるのである。

(12) 一 村々貧者共え育麥、名主より貸シ付候、貧者の手前ニて御聞可有ハ、麥何程かり、利ハ何程出申筈ニ候哉、定りの通ニ相違有之歟、御聞可有事。

「育麥」とは貧困層の夫食であろう。それを名主が貸し付けるというのは村の救済行為の性格ももつが、たんなる施行ではなく、貸与である。その貸麥の量、利子の額、それが藩の規定通りかどうかは、貸した名主にでなく、借りた貧者に目付が直接聞くことを命じているのである。

7 不審者・追放人・盗人らしき者・

乞食袖乞への対応

(13) 一 町並有之村ニテ、小百姓之内田地も無之、少々の売買も不仕日用過も仕不申、家内妻子等養ひ居申者可有之候。加様成者ハ人集の宿仕候歟、盗物買取候歟、加様の類ニて渡世仕由ニ候間、常々出入仕候者立聞候様ニ、大庄屋ニ密々御申聞可有候。右之通之者、町並之所ニも限り申聞敷候間、其御心得可有事。

藩が一円的な統治機構であるかぎり不審者を摘発、排除しようとする。ここでの不審者は浮浪している者ではなく、安定しているが

ゆえに怪しい者である。田地も持たないような「小百姓」でありながら、「町並」といえる人通りがある所なのに、なんの「売買」行為もせず、「日用」稼ぎもせず、それで「家内妻子等」を養っている。

そういう者は「人集の宿」をしたり「盗物」を買取って売り捌くなどの渡世をしていることがあるようだから、「常々出入仕候者」を大庄屋に密かに命じて調べるようにと指示している。「人集の宿」には盗賊の場合もあろうが、小百姓らの藩政・村政抗議の相談事も見つければ押え込まれることはいうまでもない。ここでは支配の周到さを見ておくことを主眼としたい。

(14) 一 在中え小間物売徘徊仕候ニ参合被申候ハ、何方之者ニ候哉、出所名共御聞、大庄屋・名主え其者御引合、已後不参様ニ御指留可有事。

村々を徘徊する「小間物売」に目付が出会ったら、その出身・名前を聞き出し、大庄屋・名主に引き合わせて今後、村へ来ないようにする。引き合わせて以後来ないようにする、というのは先の条々の趣旨からすれば、藩役人がいきなり咎めるのではなく村役人に教示させる、そのことで村方の自律力を涵養しようとしているとみてよいだろう。だがこのような行商人が持ち込む「小間物」が村方で自給できない物資であれば、その供給ルートへの提示をとまなう排除でなければ成功しないであろう。

(28) 一 御追放人立帰候を御見付候ハ、御捕御郡会所へ可被指越候。

居村追放者が帰村しているのを見つけた場合は、密かにでなく直接召し捕らえ、郡会所へ出頭する。

(29) 一 盗人らしきもの徘徊仕候ハ、密ニ可申出候。里を放レ山内川原等ニ小屋掛仕居申者之有^{有之}候ハ、注進可仕候。其所に居不申候様可申付由御申聞可有候。其村ニ乞食^{有之}之者之有候ハ、名書付御差出可有事。

盗人らしい者や小屋掛けしている者がいれば密に藩に注進し、村役人に立ち退くよう諭させる。また「乞食^{有之}之者」が村にいれば名前を書いて差し出す。

(30) 一 村方ハ不及申、御城下端々にても、袖乞ニあるき候者ニ御行逢候ハ、出所御尋御領内之者ニ候ハ、御郡会所へ可被指越事。

村方・城下端で袖乞をする者に出会ったらどこの者か尋ね、領民であれば御郡会所へ連れて行く、というのは不審者対策以上の、領内の民百姓掌握の意欲を示すものと言えよう。

8 村内での商売禁止

(15) 一 東西往還筋并因幡海道・庭瀬海道、其外他所より之往来道筋の茶屋へ請酒仕候者ハ、為旅人之ニ候得は其通り之事ニ候。其外村々にて請酒仕売申候様成者有之候ハ、村・其者之名、酒ハ何れより買候哉と酒屋の名をも被尋置可然候。

「請酒」とは小売酒あるいは酒小売のことと理解する。この時期、

往還筋には「茶屋」が開かれ旅人用に酒を振る舞う。それは当然だが、村々で請酒する者については村名と名前と仕入れた酒屋の名まで尋ねておくべきである。この指示はその者をどうするとも言っていないが、おそらく村内請酒を村役人説諭で押さえ込もうというのであろう。

(16) 一 在中にて三拾一色売物之外ニ、無益之売物御見付候は、其所之名主方へ被申届、即時ニ御指留可有事。

在々で商いが許可されている三一種の「売物」がある。それ以外の「売物」を見つけたら名主に言つて差止めるように、というのだから、ここでも名主に処置させるのである。

9 藩役人の村方からの借銀米・押買調べ

(17) 一 村方にて身躰宜者、貸シ銀など仕候者ニハ、御郡奉行・御代官・御普請奉行、其外御用にて出被申候奉行中え、銀米等にても借シ申義は無之哉と、咄之様ニ被仕、御尋可有事。

このような融通がどちら側からの働きかけで起こるのかを想像すれば、おそらく藩役人から言い出すのではあるまいかと思われる。奉行・代官などへ富裕な百姓が銀米を貸していることがないか、これまたそれを目的に調べるというやり方でなく、何気ない「咄之様ニ」して尋ねるようにと指示している。当然それは好ましくない行為として挙げられているのであるが、罪科云々には言及しない。

(18) 一 在中にて奉行役人之内、押買仕様成義ハ無之哉、御尋可有事。藩役人が村方で無理に求めて売らせる行為は、横暴さの一つとして警戒されたのであろう。

10 山林竹木保護・山林管理強化

(19) 一 山林竹木伐荒シ申様成義有之哉、見分可有候。伐取候様成義有之候ハ、見過なく早速吟味可有之事。

藩有林か村有林かは言われていないから、領内の山林竹木全般の保護令としての伐取吟味と理解される。

(20) 一 惣て年ニより願候て、百姓自林ニテ松枝一曲輪宛願伐申候。山ニ心被附願より多ク伐り申所有之候ハ、早速可有御吟味事。たとえ「百姓自林」でも「一曲輪宛」、つまり一個所を出願して伐採することが許される。それ以上伐採している事実があればただちに吟味することを命じている。

(21) 一 御山廻り共、御林之内如何様ニ見廻り申候哉、山盗捕出し候義近年終ニ無之候。自分勤不宜ニ付見付捕出し申儀無之候。勤方不宜者ニ弥相聞へ候ハ、御山廻り不被仰付御取上被成にて可有之と山廻り之者え勘右衛門・彦左衛門申候と、御申聞御返り可有事。

藩有林の「御山廻り」役の者が自分の勤務怠慢を責められるのを恐れて近年「山盗」を捕らえることがない。どのような見廻り方を

しているのかをふくめて「勤方不宜者」となれば職務を取り上げられると申し聞かせて帰ること、という指示である。誰かを摘発することを命じられているのではなく、怠慢解職の予告のかたちをとった教諭なのである。

(22) 一 竹木伐り置候所ニてハ、願ニテ伐り申候竹木ニても委細御尋可有候。疑敷様子ニ候ハ、名主手前御聞届可有事。

竹木が積み上げてあれば村方願いで伐採したものであっても委細を尋ね、もし疑点があれば名主自身から聞き取ること、と指示している。見かけた時には先ず迎りの誰かに尋ねるということであろう。

11 長期の舟懸りや筏材の点検

(23) 一 海川共、商船ニても無之、何の子細なく舟懸り仕、久敷滞留仕申様成船御見付候ハ、其所の名主ハ不及申、商売仕候もの、内ニ成共密ニ御尋可有事。

目付の監視は「海・川」をかぎらず水上にも向かう。「商船」でもなく事情もわからず長期間滞留している船がここでは対象になっている。「密ニ」という調査方針は他条と同じだが、当地の名主だけでなくその地で商いに関わっている者にも尋ねる。

(24) 一 川筋ニテ古材木筏ニ仕下し申義有之候ハ、何村之家を崩し出し申候哉、御尋可有之事。

筏は元来切り出した木材を組みあわせて作り川下げるものだが、

「古材木」で作られた筏であることが明きらかである場合、材料がどの村の誰の家を壊した廃材であるかを調べる。

12 他領米流入の吟味

(25) 一 他領米御領内へ入候哉、御見聞可有候。紛敷米ニ被行逢候ハ、出所并参所御聞届御吟味可有事。

「他領米」の疑いのある米を見かけたら出所と行き先を聞き出し吟味すること、とこの件については他の条項を超える権限ないしは責任を与えていると言える。

13 村方酒造の調査

(26) 一 村人ニテ酒造り申候者之名、御尋御書付置可有候。尤隠密ニ御尋候義ハ趣意有之候間御無用ニ候。

諸事密かに聞き出すことを命じている目付に対し、村人の酒造については、この時期米の確保が懸案になっていたのであろう、「隠密」を「無用」とし、当事者を記録しておくことを指示している。

14 村送り荷物の送受当人を明示

(27) 一 村送り状又ハ荷物村送りの判紙御見分可有候、状持ニ候ハ、

誰様より何村誰方へ参候御状と記し置候様ニ、荷物も誰様の荷物と判紙ニ書付候様ニ御申聞可有事。

村に持ち込まれる「送り状」「判紙」を点検して誰からどの村の誰へ送る荷物を明記しておくように言い聞かせること、という指示である。

15 用水設備洗淨・溝川掃除・道修繕

(31) 五月より八月迄之間、樋橋関戸分木雨天之時分洗候様ニ申付置候。洗不申処有之候ハ、雨天之節ハ百姓耕作ニモ出不申事ニ候間、名主頭取侯て罷出、洗せ候様ニ御申聞可有候。尤大庄屋へも御申聞可然事。

農繁期の後「樋橋・関戸分木」など用水装置を洗う作業の指示である。それをやっていない村は名主に言い聞かせて、「名主頭取候て」出かけて行くようにさせる。これについては、大庄屋へも申し聞かせることという指示である。

(32) 一 往来之道筋ハ不及申、横道などに損有之、往来之者又ハ作通ひニも難義仕と相見へ候ハ、百姓隙之時分繕いも仕候様ニ御申聞可有候。

これも細かな指示である。往来の道や横道に破損があれば往来者や農作通いの者の妨げになるので、農閑の百姓に補修をさせるといふのである。

(33) 一 養水筋之溝川ニ藻はり居申候ハ水掛り之為悪敷、第一右ノ藻朽侯て埋り申道理ニ候間、百姓の隙之時分取候様ニ御申付可有候。

水掛かりを劣化させないために用水路の底や側面に生え茂る藻を、「百姓の隙之時分」に刈り取るよう申しつける。これは、基盤整備でもあるが、生産技術にも直接につながる指示である。

16 耕作出精・水番・植株・草取り・施肥・

百姓経営・期待される百姓像

(34) 一 百姓共耕作ニ精出し候歟、左も無之村も有之哉、御見分可有候。四季の植物其所ニての旬ニ後レ不申候様ニ無油断心ニ入、植付候様ニ御申聞可有候。

耕作出精の村ごとの評価を行い、四季の作物を油断なく時期遅れにならない内に植え付けるよう言い聞かせる。この細かさに近世的民政が反映されており、同時に生産技術への関与までが目付の職務に入れられていることがわかる。

(35) 一 五月根付の時分より、御郡々え水番之御足輕指出し候。勤方の様子被尋置可然候。

これは軍陣的な足輕でなく、水稻の水番を行う役務の者を百姓から出すことである。中期藩政は農業から乖離するのではなく、新しい勸農政治を生み出していくのである。

(36) 一 稻株各別ニ少く植付申所有之候ハ、名主・五人組頭え様子

被尋置可有候。

稻株の少ない村は名主・五人組頭に事情を尋ねるといふのも、農業技術のレベルに入り込む勸農政治である。

(37) 一 稲之草ヲ取申義延引の由、又は麥中打延引之處有之候ハ、田地主御聞可有吟味事。

田の草取りが遅れている。麥の中耕作業が遅れている。このような田畑が目に入ったならば、それぞれの「田地主」に直接聞いて吟味する、というのも生産技術レベルの勸農政治である。

(38) 一 村々百姓共家居并家内作廻の様子、又ハ土地之善惡、作物出来善惡、兼て委細ニ被存知候様ニ有之可然候。年ニより加損米被遣候時節、其人ニ宛^(主)り加損米過無之様ニ相談可有候。

百姓の居住環境、耕作、收穫の具合を細かく認識することを求め、百姓に与える救済米も過不足ないものにするため、「兼て委細ニ被存知候様ニ」とまで求めている。

(39) 一 山中之百姓木山働第一ニ仕、田地之しやうやく疎ニ仕置候所有之候ハ、田地之しやうやく第一ニ仕、其次ニ木山働仕候様ニ、其者ハ不及申名主・五人與頭えも、此旨早々御申聞置可有候。

ここでは山中の百姓でも、山仕事より田仕事を手入れ仕事の第一におくように転換させようとする藩政の立場が明示され、名主・五人組頭を通じて徹底させようとしていることが理解される。

(40) 一 下木・下草有之村之田畑土地惡敷相見え候ハ、地主被相尋

其者之家内有人御聞、家内ノ者作廻ニて下木・下草入可申人数も有之者ニハ、少宛ニても入申候様ニ教訓可有候。名主ハ不及申大庄屋共心ニ掛、一村之者え相談仕、下草少宛ニても入申様ニ有之候ハ、年々ニハ土地直り能成可申候。下木・下草無之所ニテ可入様無之村ニ候ハ、其者の作廻次第少宛ニてもこやしの才覚仕可然候。大庄屋・名主の心入ニテ一村之者共ノ申合、麥菜種等之出来宜キ年柄ハ猶以之義、毎年少分ニても村中へ申談、得心之上つなきを仕せ置、其村土地相應之こやし買求、其村惡田へ先達て入サセ、廻り〳〵ニ田地へ養ひ入候様ニ、心懸ケ候ハ、可成義ニ候。右之品ハ其所え廻り掛り被申候時分見聞有之、不図被存出候様ニ物語候て、大庄屋・名主共、心付候様ニ御申聞可有候。

「下木・下草」とは刈敷肥料の材料のことである。それがあつたに「土地惡敷」見える場合は、「地主」を尋ね、「家内」人数を確かめ、「下木・下草」をすきこめる「人数」がいれば少しづつでも入れるように「教訓」する。名主・大庄屋も注意して村人と「相談」し、下草を少しづつでも入れれば、年がたつにつれ「土地」が改善され「能」くなるものである。

下木・下草が得られない村なら、耕作者しだいに「こやしの才覚」をし、大庄屋・名主の熱意で村中が申合せ、麥・菜種の作「つなき」の作物を作り、「其村土地相應之こやし買求」め「惡田」へ最初に施肥し、続いて外の「田地へ養ひ入」れるようにすれば村が

たちゆくはずである。技術面にも及ぶ細かな勸農政治であるが、それだけではなく、「一村之者共ノ申合」の実現をねらっている。そのためにこそ、これらの注意は通りかかりに「見聞」し、「不図被存出候様ニ物語候て」、大庄屋・名主が気づくように申し聞かせるようにするのである。

(41) 一 士農工商共ニ、徒ニ暮候は人の常ニ無之由ニ候。銘々家業之儀、日夜朝暮無間断いと名申義、人之常之由ニ候間、百姓末々ニ至迄右之段能得心仕、耕作之義ニ付候ては、日夜忘れまじき事ニ候。田畑之岸崩れ又ハ我田地え掛り候養水溝埋り候類ハ、田主自分ニ罷出仕候義ハ百姓之常ニ候。一人其身之勤纔成義と可存候得共、其村之者とも一致仕候得は、互ニ助合、田畑悪敷成申間敷候間、外を見ずして、我一人其日の勤を仕候様ニと、大庄屋ハ不及申末々の小百姓とても、申付となしニおしへニ物語の様ニ申間候ハ、可然候。大庄屋・名主権高ニ無之、卑夫と同事ニ心得末々の者へ近く、願等之義早々承道候様ニ有之可然候。小百姓共之内愚痴成者ぜうこわニ申候者ハにくみ申もの候よし承候間、惡み中心底無之、愚痴にて聞入不申ハ不便成義と存、随分合点の参り候様ニ、幾度も申間候様ニ御申間可有事。

「士農工商」ともに「徒ニ暮候は人の常」ではない。めいめいの「家業」を日夜朝暮間断なく営むのが「人之常」であるという全身分に通貫する家業勵精論を説き、それゆえに「百姓」も同じ論理に規定される。

家業の「耕作」を日夜忘れてはならない。田畑の畦を保守し水路が埋らないようにするのは「百姓之常」である。つまり「人之常」にはかならない。一人だけの働きは僅かなものと言えようが、村中が行えば「助合」となり「田畑悪敷成申間敷」ゆえ「我一人其日の勤」を大庄屋から小百姓まで行うようにと、「申付」というのでもなく「おしへニ物語の様ニ」申し聞かせるのがよい。

大庄屋・名主も「権高」でなく自分を「卑夫と同」とみて、末々の願も早々に聞き取るようにするのがよい。小百姓の中に強情に言い立てる者がいると憎む心が生まれるそうだから、「惡み中心底」を抑え「不便」なものだと思い、合点するまで「幾度も申間」させるのがよい。

この条項の前半は目付の姿勢、後半は村役人の姿勢だが、どちらも権高な命令でなく教えを物語ることによって自助の勤勉を引きだそうとしているのは同じである。

(51) 一 父母え孝行成者、一類えむつまじきもの、他人え頼母敷者、公役を大事ニ能動候者、農業勝れて精出し候もの、其外奇特成者有之候ハ、御聞届可有候。惡心成もの承候儀、同心ニハ無之候得共村の妨ニ成申ものハ、其分ニ難仕置候間名主ニ御尋可有候。情悪敷もの有之候ハ、幾度も異見仕、心行取直し候様ニ、役人共え御申間可有候。役人共異見仕候は、我身ニ邪有之候得は聞入不申物之由聞伝候間、役人共私欲無之様ニ、常々相嗜候義肝要ニ候と御申間可有候。

善行・奇特者表彰は光政以来の伝統的政策であるが、ここには期待される百姓像がくつきりと押し出されている。「孝行」「一類えむつまじきもの」「他人え頼母敷者」「公役を大事ニ能動候者」「農業勝れて精出し候もの」がそれであつて、これ以外にも思わぬ「奇特成者」があるかもしれない、それらすべてを聞き出してくることを目付は命じられている。これに対して、「悪心成もの」を知つたら同心しそうで「村の妨」になりそうな者がいるか名主に尋ねる。また「情悪敷もの」がいたら「幾度も異見」をして「心行取直し候様ニ」することを、村役人たちへ申し聞かせる。

その村役人の「異見」も、自らに邪しまな点があれば聞入れられるものでないから、「私欲」を持たないよう常々修養に勤めるべきである。

17 普請主体・日用賃米・百姓使役

(42) 一 田地え附キ候て之輕キ普請、いにしへ御上より被仰付候義ハ無之旨聞伝候。近年ハ被仰付被遣候ニ付、惡鋪心得それを頼ニ仕、少之儀ニテも御普請願出候様ニ成候、少宛之儀ハ其村より仕筈之事ニ候。御他領ニテハ繕普請重キ義ニても村より仕候由ニ候。百姓とも自分ニ仕候普請、一度ニ出来仕候様ニ可致と存候付、大儀ニて埒明不申ものニ候。一年ニ成不申候ハ、二三年ニ成共四五年ニ成共、心永ク仕申候ハ、終ニ仕おふせ可申候間、

此義大庄屋・名主・五人與頭共能合点仕候様ニ御申聞可有事。細かで密かな教訓支配が百姓の言い分をそのまま承引していくものではありえない。藩政と村運営の身分利害は厳然とある。この条項はそれである。村は耕地維持に関わる普請を小規模なものでもできるだけ藩費で行おうと出願する。ふつう他領との比較は百姓訴願が用いる論法であるが、ここでは藩側が用いて、他領では大規模な普請でも村普請でやっていると聞くのには藩に負担させようとする戒められている。

しかしここでも、強圧ではなく論しが行われる。つまり百姓が自普請を行う場合、それを一度で完成させようとするから大儀にもなり埒が明かなくなるので、一年でできなくても二三年あるいは四五年かけて、「心永ク」やれば完成させられるのだから、大庄屋・名主・五人組頭にこのことを能く合点させるように、というのである。

(43) 一 御普請所ニテ御普請奉行中、御鉄砲役之遣方之様子并日用夫ニ罷出候者、一人役ヲも得不勤程之若輩者罷出候ても、健成者同事ニ日用賃取申候哉、又健成者能役勤候者ニハまし役遣被申候哉、御尋可有事

一人役の仕事ができないような者と一人前の者と同じ「日用賃」を取るのか、一人前の者はより多く「日用賃」をもらっているのか百姓たちに尋ねる。

(44) 一 御普請奉行中并手代雇奉行御鉄砲役日用夫とも、朝之出晚仕廻の刻限委細ニ御聞可有候。

「朝之出・晩仕廻の刻限」というから百姓使役の恣意、過重を点検する調べであらう。

(45) 一 出来普請又ハ仕懸り居中御普請所ニテも、御為ニ成候村方救之為ニ成候歟、左も無之御費成御普請ニ候歟、御考可有候。御普請願埒未取掛り不申御普請所ノ義、御損益御考御帰可有事。すでに完了した普請や進行中の普請でも、藩を支える「村方救」になるものか浪費になるものかを考え、未着手の普請の「損益」を考えて判断して帰るようにする。「御為ニ成候」の次に「歟」の文字があれば「藩の為になるものか」と独立させて解釈すべきところであるが、原文書に見えないので、「村方」にかかる形容句としておく。

(46) 一 大川・小川井関波戸潮堤川堤石垣破損仕、少之儀をハ村方普請願ニ出し不申儀多ク有之候間、石少ニテも抜ケ居申所有之候ハ、場所書付御帰可有候。

小さな破損個所で村負担の「村方普請」の出願をしない所が多いので、石が少しでも抜けている個所は記録してくる。

(47) 一 御普請奉行中并手代雇奉行、御鉄砲之者とも、宿々ニての行跡如何様ニ有之哉御聞可有候。御郡奉行中・御代官・日用米渡奉行・樋方奉行手代ニ至迄、其外いつれニても在え罷出候御用人輕輩之者迄も、行跡之儀右同事ニ御聞可有事。

種々の奉行役人から輕輩役人に至るまで、在方へ出向いた藩役人の行跡を調べるようにという指示である。

(48) 一 日用米渡奉行はかり渡シニ被申付候在役人とも手くろふ成義仕申事ハ無之哉、夫役相勤候者共え無相違渡シ申候哉、御聞可有候。

「日用米」を奉行から分配を命じられた「在役人」が誤魔化しをやつていないかどうか、夫役を勤めた者にきちんと渡しているかどうか聞き出してくる。

(49) 一 日用夫ニ罷出候者ニハ、一日ニ何程何日相勤何ほと受取候哉、過不足有之候ハ、又外之者ニも御尋置可有事。

「日用夫」に出た者が一日にどれだけ、幾日勤めてどれだけ賃金を受け取ったか、答えに違いがあれば、傍証もふくめて尋ねる指示である。

(50) 一 往還筋長崎御荷物并御状箱通り候時分受取渡し念入可申條、其村請込送届候迄、途中ニテ大事ニ掛ケ申候様ニ手形取遣り相違無之様ニ随分念入可申旨御申聞可有事。

長崎への公用往来路が領内を走っているのは山陽筋諸藩の通例であるが、ここでの荷物・書状の送達を負担する村方の状態を入念に調べるようにとの指示である。

18 渡船場渡し守の心得

(51) 一 川々船渡し場渡し守、兼テ被仰付置候通、無油断昼夜ニよらず、旅人ハ不及申、如何様成者ニテモ早く罷出渡し可申條。手

負候者歟、何とそあやしき者ニ候ハ、渡し申間鋪候。右之通早々名主其外之者出合候様ニ知せ可申旨、御申間可有事。

渡船場の渡し守が昼夜によらず手早く応じて渡してやることと、「手負」の者や「あやしき者」は渡さずに、名主らが出合うように知らせるように言い聞かせる。

19 支藩・給所・国境村々の納め方

52) 一 丹波守様・内匠様御知行所并御年寄中初其外給所物成納方、前々と違ひ候様子ニ有之候哉、御蔵納り米同事未無之方も有之哉、密々御尋置可有事。

岡山藩では支藩の支配も本藩の庇護を受けている。給所も蔵入地なみの支配になってきている。しかし支藩領・給所で上納方式に蔵入地と異動がないかどうかを密々に聞き出そうとしたのは、あきらかに領主への配慮でなく、村々の百姓にとってどうかを知ろうとしているのである。

53) 一 天城・蟲明・周匝・佐伯・建部・金川・金岡・西大寺・尻海・片上・下津井・日比・鴨方・牛窓・大漂・一宮村・福岡右之所々ニては直ニ御通りなく、一日ニても一夜ニても折節ハ滞留有之、所之様子御見聞可有候。御年寄中知行所ニては、給人より百姓を御遣候儀有之時ハ如何様のあてがいニ候哉。惣して御年寄中用人より村方え之申付之品、委細御聞可有候。其外之所

ニて他所より入込候売買者之義、又獵浦ニては上方筋へ着等上せ候品御聞可有候。

天城以下福岡にいたる上記の場所では、目付は素通りしないで一日でも一夜でも滞在して、土地の様子を見聞することを命じている。上級家臣の知行所で百姓を使役する場合にはそれだけの宛がいを与えているか、給人家の用人がどのようなことを給所の村に命じているかも調べる。また他領から入り込む商人の活動、漁場では上方市場へ送っている品名も調べるように指示している。

54) 一 御国境ニてハ、他国百姓え御仕置之様子、御領分之者承及申者可有候間、御国境之村ニては何となく御聞可然候。

これは他国者への岡山藩の処置ではなく、他藩の百姓支配の実状を国境の百姓は聞き知っているであろうから、そこでは「何となく」聞くようにする。

結

第四五条に「村方救之為」という文言が出てくるけれども、右に見てきた大部な内容をもつ在廻令からうかがえる中期藩政の大きな特徴は、私見では、初期的な「お救い」中心から生産技術・用水路にまでわたる勸農政治の段階に入っていると思われる。それはいわばソフトなタッチで痒い所へ手指を這わせるといふような性格を持っている。したがって多面ではいふまでもなくきわめて管理的拘束

的監視的なものである。しかしそれはたんなる強圧の拘束ではなく、納得させる拘束であり村の共同の営みとして自らそのようにしていく拘束であり、近世政治の深度を認識させる政治のありようである。

そして強圧的でない細かな藩政とは、大きくは近世の法的支配の深まりを示すものの、じつは教令的要素が、法令体系のなかに入り込んで深くなじみ、その比重を重いものにしてしまっていることの表現である。政治のそのような変化は、順調な藩経営が続いてそれに順接して出てきたというものではない。実際は内外の社会矛盾とそのなかで規模拡大を続ける民間社会の圧力に対応することによるものである。在廻令の中にも、社会実態が藩政の解決力よりはるかに先に進んでしまっていることを反映させている条項がいくつもあ

る。

想定される疑問は、現実の政治はこのように運営されたのかというものである。たしかに五七条の文言どおりに事が運ばれたと信じらるならば、それは噴飯的な歴史への態度と言えよう。実態の研究はなされなければならない。しかしある社会の建前とされる考え方、運用の仕方には、その社会が共有するものをふくんでいる。建前の研究も必要なのである。言いかえると時代の「普遍意思」「一般意思」をとりだす歴史学的努力が必要だということである。ただし、そういうものが現象から抽出されるとして、それは誰が作るのかという難問は残る。近代以前の近世社会の場合、それらは治者の声として現れ、民の側は不満をもつ者、訴え願ひ出る者、抗議し抵抗行

動する者などとしてしか現れない。それでは普遍・一般意思とされるものは治者の意思に他ならないのだろうか。おそらくそうではない。それらが社会危機のなかで表出されることが多いということは、不満者・抗議者である民衆意思との衝突や吸収を創造契機として、治者の意思として表出されるということである。むつかしいのは、それらのうちの民衆意思あるいは社会意思の回路から発出しているものをどのように見極めるかであるが、本稿での中期的藩政の特徴のある性格も、そのような視角に立つてこそ私にとっては興味ある対象なのである。

註

- (1) 深谷克己「大名綱政と綱政期藩政」(『岡山藩権力と諸集団——意識の形成と相互関係——』、一九九六・九七年度科学研究費補助金基礎研究(B)(2)研究成果報告書、一九九八年三月)。
- (2) これより「序」の終わりまでは先稿の第3節の全文である。なお注(3)の(5)は先稿の注(39)の(41)である。
- (3) 深谷克己「近世における教諭支配」(岡山藩研究会編『岡山藩政と近世史研究』仮題、岩田書院、一九九九年刊行予定)。
- (4) 『法例集』巻之五、七〇四号、二七一―二七八頁。『池田家文庫藩政史料マイクロ版集成』B2-8 * TEB-001。本稿はマイクロ版を引用典拠にして検討していく。
- (5) 谷口澄夫は「在出」(『岡山藩政史の研究』塙書房、『岡山藩』吉川弘文館、共に一九六四年)で廻村任務を表現するが、これは藩令中の言葉を採ったと思われる。本稿は、藩令中にも使われ、理解しやすい「在廻り」を採り、五七箇条全体を「在廻令」と呼ぶ。